教職課程センター紀要　第１号　171－173ページ，2016年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.1 171－173, Dec. 2016

書　　評

T.G.ジョーダン＝ビチコフ／B.B.ジョーダン著 山本正三・石井英也・三木一彦共訳

『ヨーロッパ文化　―文化地域の形成と構造―』二宮書店

The European Culture Area: A Systematic Geography

田中　達也

Tatsuya TANAKA

Key words：

2016年６月，僅差の結果であった国民投票によって決定したイギリスのＥＵ離脱は，拡大と統合の歴史を積み重ねてきたＥＵに大きな衝撃を与え，その在り方や前途は再考を余儀なくされている。イギリスにとっても，国民投票の結果は社会的分断の現れであるとともに，連合王国からの離脱をも誘発しかねないものであり，その将来は不透明さを増している。現在，ヨーロッパは，地域・国家・ＥＵのあらゆる次元で，自己を見つめ直して相互に関係を再構築することが求められる転換点に立っているのかも知れない。

本書は，まずヨーロッパを共通の文化を保持する１つの文化的実在（文化地域）として捉えたうえで，自然環境・政治・経済・文化に関する多様なテーマを設定し，その内部の実態を多角的に検討・提示した地誌書である。「訳者あとがき」にもあるように，地誌書では国別・地域別の記述が一般的であるが，検討されるテーマごとに章立てされていることが本書の特徴の１つとなっている。これにより，テーマごとに，その地理的パターンを国の枠組みや国境にとらわれることなく提示することが可能となっている。

本書の構成は以下の通りである。

第１章　ヨーロッパとは何か
第２章　自然地域
第３章　宗　教
第４章　言　語
第５章　地遺伝学
第６章　人　口
第７章　政　治
第８章　都　市
第９章　第一次および第二次産業
第10章　サービス産業
第11章　農　業
第12章　ヨーロッパの地域構造

第１章では，次章以降での検討の前提として，ヨーロッパの地域としての定義付けを行っている。ヨーロッパは歴史的に，自然的な障壁をもつ１つの独立した自然単位であると認識されてきた（大陸神話）が，本書はこれを否定し，ヨーロッパを宗教（キリスト教）・言語（インド＝ヨーロッパ語族）・人種（コーカソイド）の３つの基本的な人文的特性を兼ね備えた文化地域と位置づける。さらに，ヨーロッパを周囲と区別するための９つの文化的特性を加え，その内部の「ヨーロッパ性」を測定する。これにより，ヨーロッパを明確な境界の存在しない，広い漸移帯をもつ文化地域であり，中央部および北西部の核心地域から東と南に向かって「ヨーロッパ性」が徐々に低下し，ゆるやかに他地域に移行すると特徴づけている。

第３章から第５章にかけて，３つの基本的な人文的特性について，現在のすがたとその形成過程がヨーロッパ内部の地域的差異を踏まえつつ示されている。そのなかで，工業化・都市化とともに衰退した少数派言語・民族言語が，グローバリゼーションおよびＥＵ統合の進展と脱工業化にともない再生しつつあるとの指摘は，逆説的であるとともに，現在のヨーロッパにおける分離主義の

前提と背景を考えるうえで興味深い指摘である。

第７章の「政治」では，その内部に多数の独立国が存在する「分裂状態」を，ヨーロッパの政治地理学的特性と位置づけたうえで，ヨーロッパ諸国の形成過程や主要国の政治地理学的分析を行っている。前者については，国家形成の始源としての核心地域に着目し，フランスのようにそれが国土の中央部にある場合と，ドイツのように周辺部に位置する場合があることや，ベルギーなどのように核心地域がなかったり，スペインのように複数の核心地域が競合する場合もあるといった，多様な国家のすがたが見いだされている。後者については，多くの国で国土がヨーロッパの核心と周辺にまたがり，その内部が必ずしも文化的に等質とはみなせないことが指摘される。加えて，ＥＵの拡大と統合の深化により，加盟する独立国の主権が，国家を超えた地域としてのヨーロッパと，諸民族の故郷となる地域の２つのレベルから侵食され揺らいでいるとする現状分析と，急速に統合が進む地域（内帯）と後れがちな地域（外帯）とに分裂しつつあるＥＵの状況が，ヨーロッパの政治的動向をさらに複雑化させるとの見通しを示す。

第８章の「都市」では，ヨーロッパを最も都市化が進行した文化地域と位置づけたうえで，５つの都市類型とそれに基づく地域区分を提示する。さらに，以前より提起されてきた「バナナ型巨大都市」とともに，サービス業が製造業を凌駕した時代における新たな都市網のすがたを示す。

第９章から第11章では，ヨーロッパにおける諸産業に目を向け，その地理的パターンの提示を試みている。「工業」（第９章）については，衰退する工業地域と，ハイテク産業・工芸品生産によるコンパクトな新興工業地域が地理的に分離するとみる。「サービス業」（第10章）では，ヨーロッパ核心地域中枢部へと顕著に集中する「生産者サービス業」と，核心と周辺の差異を見いだせない「消費者サービス業」が対置される。「農業」（第11章）では，工業化・都市化とともに進行した農業の専門化・商業化により，農業の分布においても明瞭な核心＝周辺パターンであるチューネン圏が現出したとする。

最終章となる第12章の「ヨーロッパの地域構造」において，前章までの検討により浮かび上がったヨーロッパ内部における核心と周辺，西と東，北と南の差異を総合化し，ヨーロッパを８つの地域に区分することで，本書のまとめとしている。

以上に提示した本書の内容に関連して，評者には，30年近く経過した今でも強く心に残っている講義の１シーンがある。東西冷戦下の国際政治学関係の授業でのことであったが，それは，ナチスドイツの首都であり，戦後は東西に分断されていたベルリンと，第二次世界大戦時にドイツが侵攻・占領した隣国ポーランドとの国境がどれくらい離れているか，東京からどのあたりまでの距離にあたるかとの先生の問いかけであった。当時の評者には意外なものであった答えは省略するが，先生が伝えたかったのは，海に囲まれて陸上の国境を有しない日本では容易に推し測れない，狭い範囲に地続きで多くの国がひしめき合うヨーロッパの特徴と，それゆえのヨーロッパにおける東西冷戦の厳しさ，緊迫感であったと思われる。

本書を通じて見えてくるのは，検討された観点ごとに浮き彫りにされるヨーロッパ内部の多様性である。文化的な同質性を追求した国民国家の形成にともない，ヨーロッパは多数の独立国を抱え込み，国境線が複雑に張り巡らされることとなった。このこと自体が，ヨーロッパの文化的多様性を示すものにほかならないが，それにもかかわらず，多くの国境と地域区分の境界線は一致せず，多くの国は内部に複数の地域が併存する状態にある。さらに，８つの地域区分により，国家は多様な様相をみせることになる。

第４版となる本書は，東西冷戦構造の崩壊以降，ＥＵが拡大と統合を進めていくなかで著されたものであるが，産業構造の転換にともなう既存社会の揺らぎと，これを背景とする多様な次元での分断の発現を既に示唆するものとなっており，本書の価値はいささかも減じていないといえる。ヨーロッパの今後を推し測ることは困難であるが，ヨーロッパの現状とその背景を把握するためには，ヨーロッパにおける国家の特徴の理解とともに，国家の枠にとらわれない思考が求められることが，本書を通して改めて実感される。

本書にも示されているように，今日の世界は，ヨーロッパに由来する文化が広く浸透している。第２版の翻訳書が発行された際（1989年）に，著者は「ヨーロッパを理解することは，日本のみならず，世界各国の近代化や現代の諸相を理解することにも通じる。」と本書を意義づけている。本書で扱われている各テーマのヨーロッパでのすがたと，その形成過程および形成要因の把握は，他地域のそれの理解にも資するものとなるはずである。また，ヨーロッパばかりでなく，グローバル化のなかでの現在の各地域の実態と変容過程を捉えるために，本書で実践されている，多面的な地域の把握という地誌的思考は欠かすことができないと考えられる。あわせて，

ヨーロッパを対象とした，同様の手法での継続的な研究の蓄積が求められよう。

BOOK REVIEW

Terry G.Jordan-Bychkov and Bella Bychkova Jordan
The European Culture Area : A Systematic Geography
TANAKA Tatsuya